

早産の病理学的研究

— 副腎について —

広島大学原爆放射能医学研究所遺伝学部門

岡本直正・佐藤幸男
宮原晋一・日高惟登
秋本尚孝

目 的

早産の原因を解明する目的で、前回は母体側異常、児異常所見及び死因等を検討した。その結果、早産側に副腎の形成異常がみられることを報告した。今回はこの点につき、よりくわしく分析した。

研究 方法

解析可能な5973例の剖検材料をもとに、早産（胎令5ヶ月から9ヶ月まで、体重2500g以下）と死産（胎令10ヶ月、体重2500g以上）症例の副腎を、計測学的並びに病理組織学的に比較検討を行い、詳細な解析と考察を加えた。

結 果

副腎重量を、胎児重量を指標として、早産と死産胎児の間で比較した。その結果、副腎重量減少例は死産（2.0%）より早産（6.0%）に多く、逆に重量増加例は早産（5.4%）より死産（9.4%）に多くみられた（Table 1）。さらに減少例は体重がほぼ1800g以下に限定されていたのに対し、増加例にはそのような傾向はなく、死産の副腎重量増加例と明確な体重の境界を示さなかった。

これらの副腎重量減少例及び増加例の母体側異常や児の死因では、早産の原因となりうるような特定の因子を見出すことはできなかったが、減少例では死産（0%）に比べ双胎の占める頻度が早産（28.8%）で著明に高くみられたことは注目すべき点であった（Table 2）。この頻度は、早産全症例中における双胎の頻度（8.3%）よりも高く、体重が同胎令の児よりも低い双胎では、体を構成する臓器の一つである副腎がさらに軽い傾向がうかがわれた。副腎重量増加例では、双胎は

死産（6.9%）で早産（3.1%）より多く見られているが、全症例における頻度と比較すると、あまり大きい意味はないものと思われた（Table 2）。

次に病理組織学的観察では、副腎重量減少例のうち、猿頭症例は極めて薄い皮質ながら、permanent cortex は良く発達し、その重量減少はfetal cortex の高度の低形成によるものと思われた。他の異常又は奇形症例（兔唇・口蓋裂、双胎児、胃びらん等）はほぼ薄いfetal cortex に比較的良く発達したpermanent cortex がみられた。これらは無脳症で知られた事実からも明らかなように、胎生期内分泌環境の異常が想定される症例ほど、副腎の重量減少がより著明に促進されていることを示唆した。一方、副腎重量増加例では、どの症例も正常より厚いfetal cortex をもっており、permanent cortex は対照と比べて特定の傾向を有していなかった。

考 察

検討の結果、副腎重量減少例が早産に多くみられ、しかも減少例は双胎を始めとする低体重児に多く存在する傾向がみられた。このことから、副腎重量減少例における早産を生じる傾向が示唆されたといえる。

又、組織学的検討で、一つにはfetal cortex 形成又はinvolutionの程度、他にはpermanent cortex の形成良悪の差がみられた。これらをとおして、副腎重量減少例に早産の成因を解明する上で手がかりとなりうるような所見が得られた。

以上から、胎生期内分泌環境のより厳密な検討が今後すすめられるべきであると考えられた。

Table 1

副腎重量減少及び増加例の頻度

	全症例	減少	増加
早産	1211	73 (6.0%)	65 (5.4%)
生存	345	29 (8.4%)	39 (11.3%)
死亡	866	44 (5.1%)	26 (3.0%)
死産	307	6 (2.0%)	29 (9.4%)

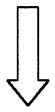
Table 2

副腎重量の減少及び増加における双胎の頻度

	減少	増加	全症例
早産	21/73 (28.8%)	2/65 (3.1%)	100/1211 (8.3%)
生存	13/29 (44.8%)	1/39 (2.6%)	63/345 (10.4%)
死亡	8/44 (18.2%)	1/26 (3.8%)	37/866 (4.3%)
死産	0/6 (0%)	2/29 (6.9%)	14/307 (4.6%)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

早産の原因を解明する目的で、今回は母体側異常、児異常所見及び死因等を検討した。その結果、早産側に副腎の形成異常がみられることを報告した。今回はこの点につき、よりくわしく分析した。